

2025年に読んだ本

<1> 神奈川県歴史 (山川出版)

読書期間=2024年12月~2025年4月

時代の境目で様々な動きをした神奈川県が持つ、多面的な顔をすべて理解するのはかなり難しいと感じた。地域ごとに様々な歴史を持っており、時代の流れとともに頻繁に大きく変化してきた地域と、一貫して一つの流れの上にのみある地域とがある。

多面体の多色刷りのような県なので、「神奈川県歴史」という一本に絞った語りは困難と言う感じがした。歴史年表上のひとつひとつのできごとを別個にきちんと理解しなければならぬ難しさがある。それが神奈川県であることがわかった。

<2> 加耶/任那~古代朝鮮に倭の拠点はあったか (中公新書): 仁藤敦史 著

読書期間=2025年6月~7月

我が国の歴史教科書で語られてきたのは、百済・新羅・任那・高句麗が中心だが、朝鮮半島側から歴史を整理していくと、これらのほかに「加耶」と言う国の存在が浮き彫りになってくる。

それぞれの国の流れや動きと倭国との接点や関係について明らかにしている。

また、朝鮮半島側で発掘された古墳の形や内容などから、倭国との関係を改めてまとめており面白い。日本人が書いた歴史と、朝鮮半島側で書いた歴史を合体・攪拌させることにより、本当の(正しい)歴史資料がまとめられて、有意義な資料になるのではないかと感じる本だった。

<3> 原阿佐緒の生涯 その恋と歌 (古川書房): 小野勝美 著

読書期間=2025年7月

母の遺品の中に「原阿佐緒の生涯 その恋と歌」と「原阿佐緒歌集」があった。

歌集は数量限定で出版されたもので、「原阿佐緒の生涯」は著者に直接接触して入手したサイン入りの逸物。宮城県黒川郡にある原阿佐緒記念館に寄付することにし、寄付の前に読んでみようと思って、この一冊に取り組んだ。

原阿佐緒は、1888年生まれのアララギ派の歌人。妻子ある物理学者との恋愛などの出来事で有名になってしまったが、著者は歌人として、人間としての素顔に迫る狙いでこの一冊を書いた。読書の所感は、下記資料に詳述したので、ここでは省略する。

<http://www.l.u-netsurf.ne.jp/~TKOB/haraasa1.pdf>

<http://www.l.u-netsurf.ne.jp/~TKOB/haraasa2.pdf>

<4> 大阪ことばのなぞ (SB 新書): 金水敏 著

読書期間=2025年7月~9月

大阪ことばをいくつかの切り口で分析していて、面白い本だった。しかし、

大阪ことばの歴史を遡った分析よりも、現代になってから様々なメディアを介して変形してしまったあたりに注目してページを多く割いており、少々期待外れなところが多かった。

大阪ことばが全国区で活躍するようになってしまい、その結果標準語(共通語)と混ざり合っ

しまったことによる変異が発生してきていることを感じた。

<5> 日本の私鉄 東武鉄道 (毎日新聞社): 広岡友紀著

読書期間=2025年9月~10月

東武鉄道の各路線の沿線の街の歴史などにも期待したのだが、会社としての「東武鉄道」に照準を合わせた本だった。各鉄道路線の沿線を辿った本が多く出てはいるが、なぜか東武線については数少ない。東上線の沿線歩きを検討中なので、探し出した本だったが、残念ながらあまり役には立たなかった。

<6> よみがえる神話の世界 (宝島社新書): 瀧音能之監修

読書期間=2025年10月~12月

各地で古墳や建造物の遺構などの発掘が続き、いろいろな新しい事実が見えてきていることから、神話に登場する様々な場所や情景について、検証している。これまで疑問とされていたいくつかのことについて、新しくわかったことを重ね合わせて考察しているところが興味深い。これまでは、古事記・日本書記は必要な時に拾い読みする程度だったが、この本を読みながら「古事記」を通して読んでみようという気が起きた。

<7> 現代語訳 古事記 (河出文庫): 福永武彦訳

読書期間=2025年12月~

旅先で見つけた寺社の沿革を調べて、その土地の歴史を知ることが面白く感じるようになった。歴史を遡ると、神代の昔に辿り着き、史実と神話の混ざり合った世界になり、記紀を参照することが少なくない。つまみ食いの的に参照していた古事記を一度きちんと読んでみたいと思い、この本を読み始めた。

約800ページの本の約一割のところまで読み進み、イザナギ・イザナミが国を生み、神々を生み出したところまで読み進んで、2025年は大晦日を迎えた。(読書継続中)

「古事記」を読み終えてから、前項の「よみがえる神話の世界」を読んだ方がよかったかもしれない。

以上